

---

# 秋色に染まる紅葉と共に

shirahae

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

秋色に染まる紅葉と共に

### 【Nコード】

N6564D

### 【作者名】

shirahae

### 【あらすじ】

復帰第一作目、イヌズキノネコ先生の代筆としてかかせていただきます。今から三百年前の日本で起こったことが現代に…?!ちょっと不思議な恋愛ストーリーをどうぞ。

## 第一話：三百年前（前書き）

一時期ネットが使用不可能となっており、久々の執筆活動でございます。この作品はイヌズキノネコ先生の代筆です。連載開始まで大分と時間がかかってしまいましたですがこれからようやくスタートです。

## 第一話：三百年前

宝永二年（千七百五年）、第五代將軍徳川綱吉が統治している頃、とある村に一人の少女が居た。彼女の名前はおりん。彼女は今一人で旅をしている。世間ではお蔭参りかげまいという伊勢神宮への集団参詣さんけいが大流行し、農民、町民、武士の階級問わずして大勢の人が伊勢神宮へと向かった。おりんもそのうちの一人で、彼女は住んでいる村を代表して伊勢神宮へと向かったのである。

そんな彼女はとある御茶屋で一人の少年とであつた。彼の名前は三好義高みよしよしたか。彼は武士の家系で名字帯刀が許されている郷土きつちの息子であり、先祖は戦国時代の將軍の一人であつた。彼はおりんの一人旅はあぶないとのことで一緒に伊勢神宮へ向かおうと誘い、二人で伊勢神宮へ向かうこととなつた。

彼らは二人とも美男美女であるためか、それとも歳が近いためかはわからないが、二人は身分を越えてとても仲良くなりついに恋仲となつた。無事参詣さんけいを終え、帰りの道中に秋色の下で恋文を交換することを約束してその場を別れた。

後、おりんは村の行商人に手紙を託し、義高は使いのものに手紙を届けてもらい、二人の文通が幾度と無く繰り返された。

ある秋の風が冷える日、義高が外出先から家に戻ると父親が庭で焚き火をしていた。その焚き火をよくよく見ると、おりんからもらった手紙がその火の中に。彼は怒り父親をどういふことだと問いただすと、父親はもう農民の少女などとは縁を切れと言返したただけであつた。

それでも諦めきれない義高は、父親に隠れて一通の手紙をおりんに送つた。内容は、約束をしたあの秋色の下で再び会おうというものであつた。

義高が送つた手紙に示された時刻、彼は一人おりんを待っていた。すると向こうの方から人影が見え、おりんだと思って小走りに近づ

くとそれはおりんではなく、彼の父親であつた。

父親はおりんから手紙の内容を伝え聞いたと話し、おりんが自ら身を引くと言つていたと語つた。義高は絶望し、その場に崩れ父親につれられ家へと歸つた。

一方おりんは手紙を受けた後、誰にも一言もその内容を話さずに、示された夜に約束の場所へと向かつていた。しかし道中、義高の使いのものだという男に声をかけられ、義高は来ない、もう文通もしないということを伝えられた。彼女も義高と同様にその場に崩れ、使いのものにつれられ村へ歸つた。

以降、父親に引き裂かれた彼と彼女は再び出会うことも無く、哀しい、しかし強い想いを背負つて一生を終えた。

「つていうのがうちの神社に伝わる話さ」

「えー！ 二人ともすげーかわいそう……」

「んで、うちの父さんが言うには二人の霊は恨みをもつて現代でもまだ出会えずうろつろしてゐる……」

「うえ… やだなそれ」

「ははは！ ただの怖い話だと思うけどね」

「なんだよ！ 脅かすなっつーの」

「ま、ちようど今から三百年前の話だつてことで僕の話は終わりー。」

次は君の番だよ、宏隆<sup>ひろたか</sup>」

二千五年のとある高校の教室で、傾きかけた太陽を背に、神社の神主の息子である智紀<sup>ともりの</sup>と、一般家庭に住む宏隆は暇つぶしに話を繰り広げていた。彼ら二人は特に部活に所属するものではなくいわゆる帰宅部であつたため、放課後はたつぷりと時間をもてあまし、よく二人で教室に居残つて話をしていた。

「んー……そろそろネタ切れなんだよねー…… って！ 明日数学の

テストじゃん！」

「そーいえばそーだねえ」

「やっべ！ 俺何も勉強してねえ」

「ふふ……僕は宏隆と違ってばっちりさ」

「ゴメン！ 俺帰るわ！」

少し風が冷える十月の初め、宏隆はまだ緑色のもみじの通学路を走って行った。

## 第二話：繋がり（前書き）

作者多忙のため執筆が滞っており非常に申し訳ありません。次話投稿はできるだけ早くに投稿しようと思っております。

## 第二話：繋がり

「宏隆！ 今日のテストどうだった？」

「聞くな……」

「ほお。 その様子だと史上最悪の手ごたえでも得たか？ ふふ」

「うるせえええ！ もう俺のことはほっといてくれえええ」

泣きそうな声で叫ぶといつも談笑している時間の教室を飛び出していった。

「あ！ 宏隆！ もー僕暇になるじゃないかあ」

「くそー。 智紀はきつと成績いいんだろつなあ……」

「神主の息子つてやつぱ頭いいもんなんだろうか……」

学校から少しはなれた公園で緑色のもみじを眺めながらぶつぶつとテストのできの悪さについてつぶやいていたとき、もみじの向こう側に見える真新しい家の前にとても大きなトラックがとまった。トラックの側面には引越センターとかかかれている。

しばらくすると家の中から女の子が出てきた。どうやらこれから引越し作業をするらしく、トラックから降りてきたつなぎを着た人と色々と会話をして、すぐ後に同じ色の同じデザインのつなぎの人たちが動き出し、次々と物を中へ運んでいった。

何を思ったのか、いや、何も思っていないのか、宏隆は無言で一点をみつめたまますつと立ち、その家のほうへ歩き始めた。彼の視線をたどるとそれは、その新しい家の新しい住人になるであろう先ほどの女の子だった。公園の入り口で新築の家の道を挟んだ向かい側のもみじのふもとで立ち止まった。すると女の子は視線を感じたのか宏隆のほうを見た。宏隆は一言も発せずただ彼女を見つめている。彼女もまた、無言で彼を見つめ返し、そしてやわらかい、美し



い笑顔を彼に送り、家の中へ入っていった。彼の傍にあるもみじの木はほんのりと赤く染まる準備が始まっていた。

次の日の朝、宏隆は自分の席におとなしく座っていた。彼はあの後から今まで何も考えることができない様子だった。彼女のこと以外は何も。

「おはよう宏隆。どうしたの？ 親にこっぴどくしかられたか？」

「智紀か…… おはよう。テストなんてどうでもいいさ」

「大丈夫？ ぼーっとしてるけど熱とかあるんじゃない？」

「体温は正常さ…… 熱はあるかもしれないけど」

「…… 本当に大丈夫？ 言ってることおかしいと思うんだけど」

心配そうに覗き込む智紀の笑い声が混じった質問に宏隆はずっと上の空で答えになっていない答えを繰り返した。

チャイムが鳴り、まだ気持ち<sup>はい</sup>が授業の雰囲気に入っていないざわざわした教室へ先生と、一人の真新しい制服を着た女の子が入ってきた。と同時に宏隆は若干うつむいていた顔を勢い良く上げ、彼女の目をしっかりと見つめた。その女の子は昨日見たあの美しい彼女だった。

「しずかに」。 転校生を紹介します。 みずさき みすず 水崎観鈴さんです」

「はじめまして。 親が良く転勤するので多分短い間ですがよろしくお願いいたします」

教室が彼女の美しい声に反応したのか、わざわざいていた教室が一瞬の間に静まる。教室の生徒が彼女を注目している中、宏隆はだれよりもより真っ直ぐに彼女をみている。彼女の視線も真っ直ぐに彼の目に向いている。

彼と彼女は出会ったときからわかっていた。お互い一目ぼれをしたということに。

数日後、もみじが真っ赤に染まる頃、彼と彼女は付き合うことになり、そして学校中で仲の良いカップルであると有名になった。

時はしばらく経ったある日の放課後、話し相手がとられてつまらなさそうな顔をした智紀が帰ろうと外を見ると、風がうなり声を上げ、雨が地面を激しくたたいていた。すると彼は次第に顔を曇らせ、宏隆と観鈴のところへ行き、一言のこして急ぎ足で帰っていった。

「今日は嫌な感じがするから、気をつけて帰ったほうがいいよ」

二人は何のことかわからない様子で顔を見合わせたが、一応忠告を受け入れ、観鈴の家まで一緒に帰り、宏隆はその後雨でアスファルトに張り付いた真つ赤なもみじを踏みながら小走りで家に戻った。その日の夜、特に何事もなかったことを観鈴に電話をし、彼女も特に変わったことはなかったと答え、智紀の思い込みだろうということ電話を切り眠った。

「おりん……そなたは何処いずこに居るのだ……？」

「誰だ……？」

「声が聞こえるのか？」

「ああ」

「拙者は三好義高と申す」

「三好……どつかで聞いたことが……ああ、智紀の話か。　　つてまさかお化け……」

「一つ話を聞いてくれまいか」

「んまあ聞くだけならいいけど。　　何だ？」

「我はある女性と恋仲になったのだがそれを引き裂かれてしまった」「うん、聞いた。　　ひどい話だね」

「おりんと別れたときは彼女をうらんだが、後父上の仕業おかしなわざと聞いて彼女に一言謝りたく思う」

「なるほど……それでそのおりんさんがどこにいるかわからないと？」

「左様。　　おぬし、力を貸してくれまいか？」

「どうすればいいんだ？」

「拙者はこの地に想いを縛られており動けない。　　しかしあの秋色

の葉があれば……彼女に想いを届けれるかも知れぬ」

「秋色……？それって何……」

「説明する暇がない。頼んだぞ……」

次の日の朝、教室で観鈴をみつけ昨日の夢の話をしたところ、彼女も夢をみたと答えた。話を聞くと彼女の夢枕に立ったのは義高ではなく、おりんであること意外はすべて同じ内容であった。そして智紀が教室に駆け込んできて、一息で長い文章を二人に向かって叫んだ。

「昨日帰ってみたらご神木に雷が落ちたらしく、一部が燃えてて、そしたら父さんにさ、新しく来た子とかいないかってきかれてね、一人居るって言ったらその子誰かと付き合ってるのかときいてきて……宏隆と付き合ってるって言ったら二人にこれを渡せって預かってきた！」

彼の手の中に在るのは古びた書物だった。宏隆はそれを受け取り中を開いてみると、この間智紀が語っていた話が書かれており、それを流し読み、最後の見開き二ページに彼らがであった大まかな場所が記されていた。そして見開きをめくった最後のページに短い文章が書かれていた。

『恨み解きし者は災難がふりかかるであろう』

「災難ってなんだ……？」

「それは父さんでもわからないって言ってた」

「でも、ほっとけないよ。私、三百年も苦しむなんてつらいことだと思う」

「そうだな……まさか死ぬなんてことは流石にないだろうし、いちよやるか！」

「うん！おりんさんも義高さんもそんな悪いことしてこないはずよ。だって私たちが救うんだもん」

### 第三話：分岐、そして交差

宏隆、智紀、観鈴の三人は早速義高とおりんのさす「秋色」とは何かを考え始めた。

「うーん。秋色ってことは秋限定のものだよねえ……私が思い浮かべるのは……柿？」

「俺は栗かなと思ったんだが」

「まったく……二人とも食べ物とかロマンがないなあ」

「なんだよ。そういう智紀は何だと思っただよ」

「もみじなんじゃないの？」

「ああー！なるほどお。確かに素敵だね！」

「そういえば俺と観鈴が出会ったのもさ、もみじが色づいてきたころだったよなあ」

「うん！それでももみじが真っ赤になった頃に付き合い始めたんだよね！」

「それだ！」

いきなり張上げられた智紀の声によって二人の出会い話は中断された。

「どうした？」

「ずーっと考えてたんだ……何故おりんさんと義高さんが君たちに頼んだのか」

「ふむ……確かに何で俺たちなんだろうか」

「おりんさんと義高さんはもみじに縛られているんじゃないだろうか？」

智紀の言葉が何を語っているのかを瞬時に理解をした観鈴が間髪入れずに答えた。

「約束をはたせなかったから？」

「うん」

「それだけで説明できるかなあ？」

「そうなんだよねえ……」

「ごめん俺……話についていけないんだけど……」

「あ！　ねえ宏隆！　君の先祖ってなんか凄い武士とかいつかの放課後に言っただけだったの？」

「ああ、そんなこと言ってたな。　今の俺は馬鹿で偉い武士の影なんか全くないけど」

「へえ〜！　そうだったんだ！　すごいね〜」

「それってさ、もしかして義高さんの家系だったんじゃない？」

「さあ……？　親父に聞いてみたらわかるかもしれん」

「それじゃさ、今日帰ったら聞いてみてよ。　一応僕も帰って何かヒントになる資料がないか見てくるから」

「じゃあ私はもみじの種類とか調べてみる！」

「ちよいまった。　秋色の葉があれば思いを伝えられるといわれたが、それがもみじだったとして、それをどうすればいいんだ？」

「お墓にもっていったらいいんじゃないかなあ……」

「ふむ……とりあえず親父に聞いてみるか」

「うん。　ああ、あと僕はお蔭参りの資料とかないかも探してみるよ」

「ありがとう、智紀くん」

感謝に対し智紀は観鈴ににっこりと笑顔を返したが、ポツリと二人に聞こえないような声で口から一粒の言葉がこぼれた。

「宏隆が戻ってくるなら……」

その日の夜、三人はそれぞれのやるべきことを進んで行った。宏隆は父親が帰ってくるなり聞いた。だした。

「ねえ、うちの先祖ってさ、偉い人だったんでしょ？」

お帰りと言われるだろうと身構えていた父親は、予想外の言葉が息子から出てきたのに驚きと疑問を感じながらも、息子の真剣な顔を見てきちんと答えることにした。

「そつだよ。偉い武士の家で結婚する相手とかも選んでいたようだね」

「江戸時代のことってわかる？」

「俺も親父、宏隆からみたらじいちゃんから伝え聞いたぐらいだからなあ。大体のことしかわからないんだが、どうした？」

「あのだ、三好義高っていう人、先祖にいとかわかる？」

「うーん。下の名前までは知らないけど、三好っていう苗字であつたことは確かだったかな。じいちゃんの家にか家系図があつたらそれで確かめられるかもしれん」

「そつか。ありがとう！」

一方智紀は家に帰るやいなや、神社の蔵に入らせてもらい、当時の資料がないかを探していた。すると『参詣者記録名簿』と表紙に書かれた一つの古い書物を見つけ、早速中を見てみた。

「みよしよしたか……みよしよしたか……」

呪文のように名前を唱えながら、五百ページほどあると思われる分厚い黄ばんだ本を丁寧に端から端まで注意深く目で名前を追つた。その作業を始めて二時間後、ふと、彼の目がとまった。

「あつたあー！」

そこには美しく書かれた「三好義高」の文字の隣に同じ筆跡で「おりん」と記されていた。

「うちの神社にも寄つていたんだ……」

「うちにこの資料が在るということは、他の神社にも似たようなものがあるはず……」

「ん……待てよ……」

そういつと智紀は再び続きを読み始めた。するとその資料の終わりにさらに再び「三好義高」の文字を見つけた。しかし今度は「おりん」の文字が隣になかった。

「……って事は歸りにうちの神社によつた時は一人だったって事だから……これを近くの神社で探して、最後に二人で居た神社の近く

のもみじの木を探せば……」

「いや、江戸時代からまだ生きてるもみじの木とかあるのかな？  
あつたら大きくてわかりやすそうだな……」

「観鈴！ 何をやってるの？」

会社から帰ってきた母親が公園のもみじの木をじつと眺めている  
観鈴に声をかけた。

「おかーさん！ もみじってさ、色んな種類あるよね？」

「ええ、色々あるけど……それがどうしたの？」

「詳しく教えてほしいんだけど」

「いいよ。 とりあえず家に入りなさい」

「はい」

暖かい紅茶をカップに注ぐのを見つめながら再び観鈴は母親に質  
問をした。

「もみじってさ、珍しい種類とかって無いの？」

「そうねえ……」

ソファーに深々と座り入れたての紅茶を一口流すと、何かをひら  
めいたのが重く閉じていた口が軽やかに語りだした。

「もみじって、染まると赤色になるのがよく思い浮かべられると思  
うんだけど、黄色に染まるもみじもあるの知ってる？」

「そんなの在るの？」

「ええ、青柳っていう種類のもみじなんだけどね、別名を右近って  
いうの」

「右近……」

突然、観鈴が頭をかかえた。

「っ痛！」

「どうしたの？」

「わかんない。 いきなり頭痛が……耳鳴りもしてきた」

「大丈夫？」

「うん。 たいしたことないよ。 続けて」

「それで、その右近は凄い昔からあつたって聞くの」  
「へえ……そうなんだ。　ありがとお母さん！」

次の日の放課後、三人は昨日得たそれぞれの情報を提供しあつて再び昨日のように議論を始めた。宏隆と智紀は隠されたお宝を見つけ出すような気持ちで少し浮かれ気分楽しく議論をしていたが、ただ一人、観鈴の顔だけは曇っていた。

「どうした？　体調でも悪いかな？」

美鈴の様子がおかしいのに気づいた宏隆は声をかけた。

「ん……なんでもないよ。　ちよつと昨日頭が痛かったのがまだ続いているみたい」

「大丈夫？　今日は僕と宏隆の二人で話してもいいよ」

「いや、大丈夫だよ。　気遣いありがと、智紀くん」

「そっか。　まあ無理しないようにね」

観鈴はやさしい微笑をくれた智紀に何かしら違和感を感じながらも気のせいであると思い、気にしない事にした。しかし本当は、気のせいではなかった。彼の微笑みは目にまでは至っていなかった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6564d/>

---

秋色に染まる紅葉と共に

2010年10月17日02時49分発行